

〔企画展〕 神戸女子大学古典芸能研究センター研究資料集1 『説経稀本集』 刊行記念展示

# 説経稀本展 図録

— 森修文庫・志水文庫 —

— 阪口弘之氏蔵本から —

## 説経稀本展—森修文庫・志水文庫・阪口弘之氏蔵本から—

場所 神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

期間 2018年4月16日(月)～6月15日(金)

説経、説経節とは中世に始まり、17世紀に盛時を迎えた語り物である。その内容は宗教色の強いもので、そのほとんど全てが神仏の由来を説く本地譚や神仏の奇瑞譚である。説経の代表曲といえば、『かるかや』『さんせう太夫』『しんとく丸』『梵天国』『小栗判官』『あいごの若』などが挙げられる。富貴の家に生まれた主人公達は、突然の出来事に貧苦の身となり、苦難の道をたどることとなる。彼等はそれぞれに愛別離苦・漂泊流離の果てに再び富貴の身へと返り咲く。多くの物語がこうした展開を持つ説経の物語は、説経の主人公と同じく漂泊をする人々であった説経者によって、各地で語り継がれていった。近世に入ると、説経は操と結びつき都市で興行を始める。それと共に説経のテキストは正本として、あるいは絵入草子本として刊行されるようになる。

神戸女子大学古典芸能研究センターでは2015年以来、「説経」に焦点を当てた研究会や講座を行いその成果を刊行してきた。2018年3月にはその締めくくりとして『説経稀本集』(和泉書院)を刊行した。企画展では、古典芸能研究センター研究資料集の第1冊目にあたる『説経稀本集』刊行を記念して、『説経稀本集』所収の本を含めた様々な種類の説経の本を展示した。

なお、展示した資料の内、「森修文庫」は、神戸女子大学図書館が所蔵する故森修神戸女子大学名誉教授旧蔵の資料であり、「志水文庫」は、古典芸能研究センターが所蔵する信多純一神戸女子大学名誉教授旧蔵の資料である。神戸女子大学が所蔵する近世資料の二大コレクションから説経関連資料を選び、さらに前古典芸能研究センター長の阪口弘之神戸女子大学名誉教授個人蔵の資料をお借りすることで、今回の展示は開催することが出来た。関係者各位に深謝する次第である。

### 【参考】

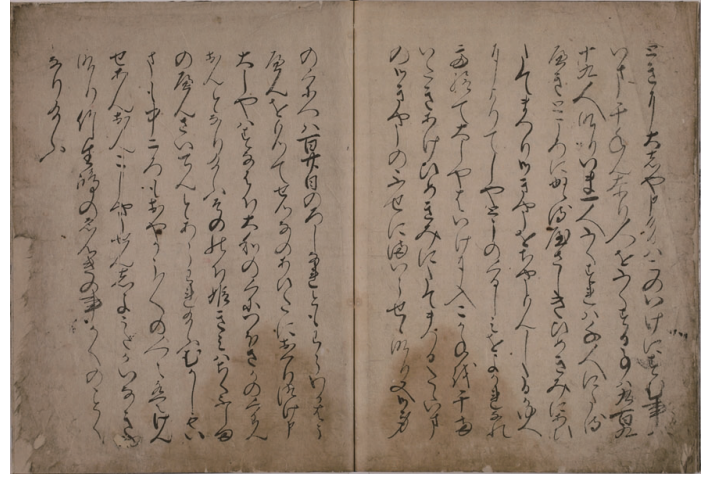
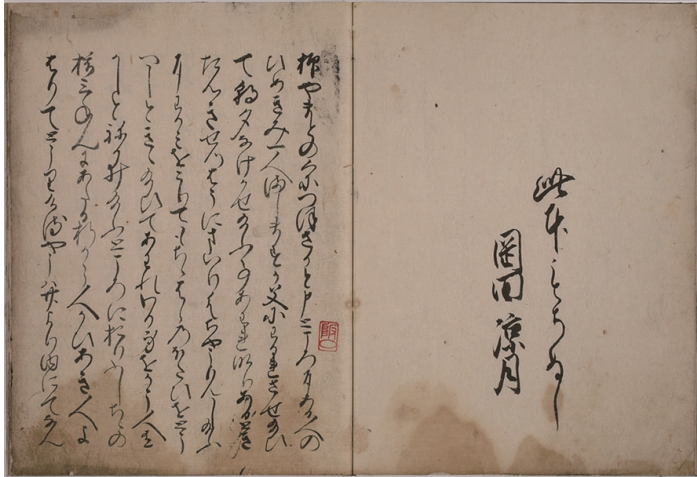
ドイツ・フランクフルト市立工芸美術館蔵フォーレッチ・コレクションの奈良絵本群について  
ベルント・イオハン・イエッセ  
(神戸女子大学古典芸能研究センター編『説経 人は神仏に何を托そうとするのか』(和泉書院)より引用)

1920年代末から1930年代初めにかけて当時のドイツ大使エルンスト・アウグスト・フォーレッチ博士は東南アジアで蒐集した東亜コレクションと共に関西の古本屋で小さな絵入り写本文庫も買い集めた。フランクフルト市政府が一九五九年、フォーレッチ博士の東亜コレクションを買い取った折、博士が東亜コレクションに付して寄付したのが、マイン川畔に到着したフォーレッチ・コレクションの奈良絵本群である。

その奈良絵本群は日本以外では殆どお目にかかれないような、挿絵を施した作品で、四角の茶または黒の漆器箱に保存されたまま、美術館旧館の最上階の本棚に長い間眠っていた。その当時、そのコレクションを觀賞した人々は「夢を見た」ような印象深い経験を記憶していると言う。(中略)

フォーレッチ・コレクションを市古貞次博士の6分類によって示すと、以下の通りである。

「公家物」	「武家物」	12792a-c「ふんしやう
12791a,b「横ふえ 上(下)」	12783a,b「さかみ川 上(下)」	上(中・下)」
12794a-f「秋月 第一(～六)」	12785a-c「しゆてん童子	12793a-c「文章草子」
12799a-c「太しよくわん 中」	上(中・下)」	12796a,b「文正艸昏 中(下)」
12801a「小町 上」	12797a,b「から糸 上(下)」	12804a,b「文章草子」
12805a-c「今宵少将物語。	12798a-c「した物語 上(中・下)」	
一名 雨やとり 上(中・下)」	12802b「しつか 中」	「外国物」
	12803b「ひてさと物語」	12782(a,b)〔くまのゝ本地〕
「宗教物」	12806a,b「しんきよく 上(下)」	12787a-c「ほうめうとうし
12795b「第貳」〔釋迦の本地〕		一(二・三)〕
12800b「ほうさうひく 下」	「庶民物」	12795b「第貳」〔釋迦の本地〕
	12784a-c「さよひめ 上(中・下)」	12800b「ほうさうひく 下」
	12788a,b「ひおけ」	
	12789a,b「文章草子」	
	12790a,b「ふんしやうの上」;	
	「にみとの御草し」	



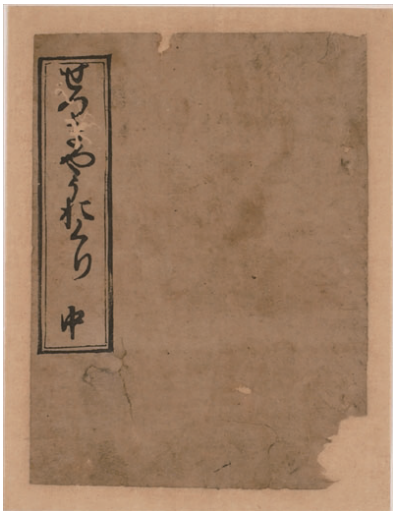
1 つほさかのさうし



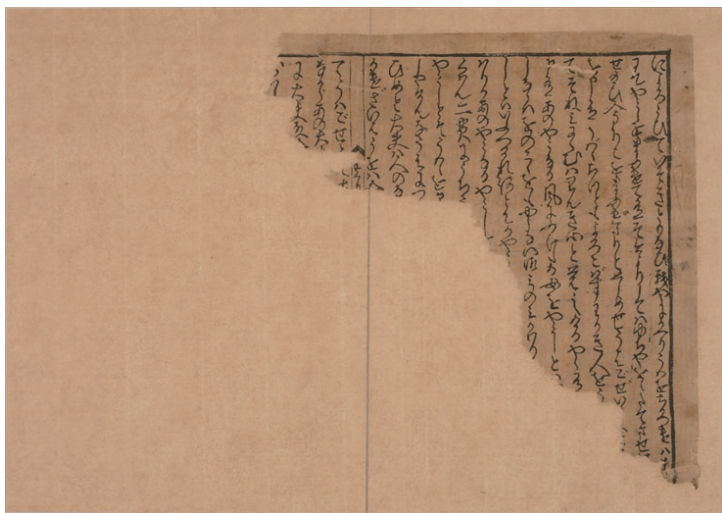
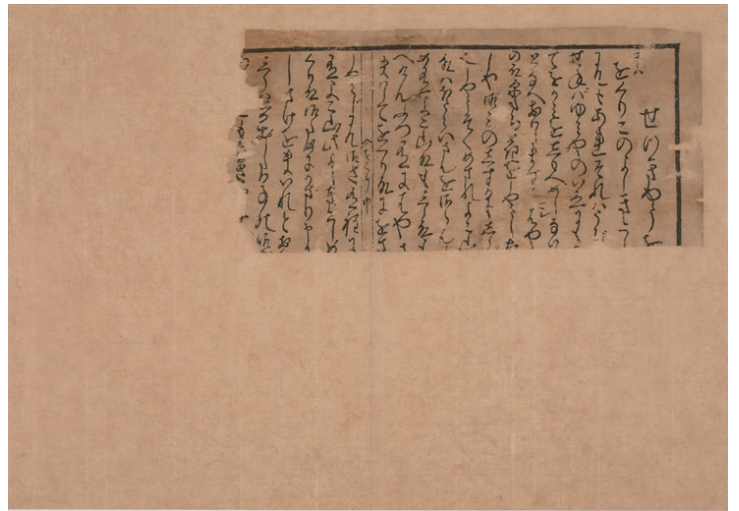
2 すみだ川



3 パネル「写真で巡る小栗の旧跡」



4 せつきやうおくり (零葉)

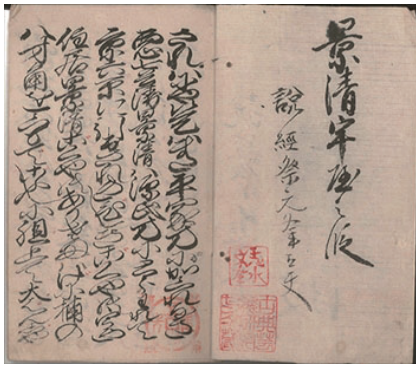


5 をぐりの判官

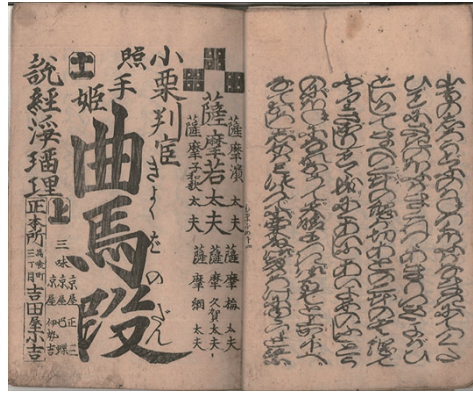


7 (参考) 小栗照手再の対面





8 (参考) 景清牢屋の段



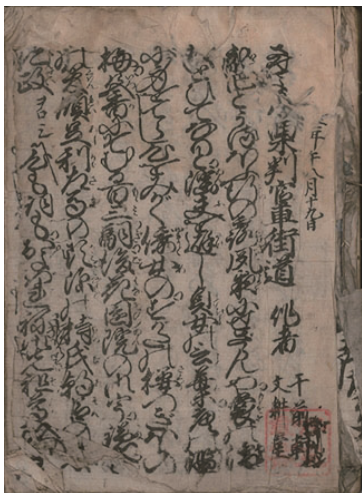
9 (参考) 小栗判官照手姫



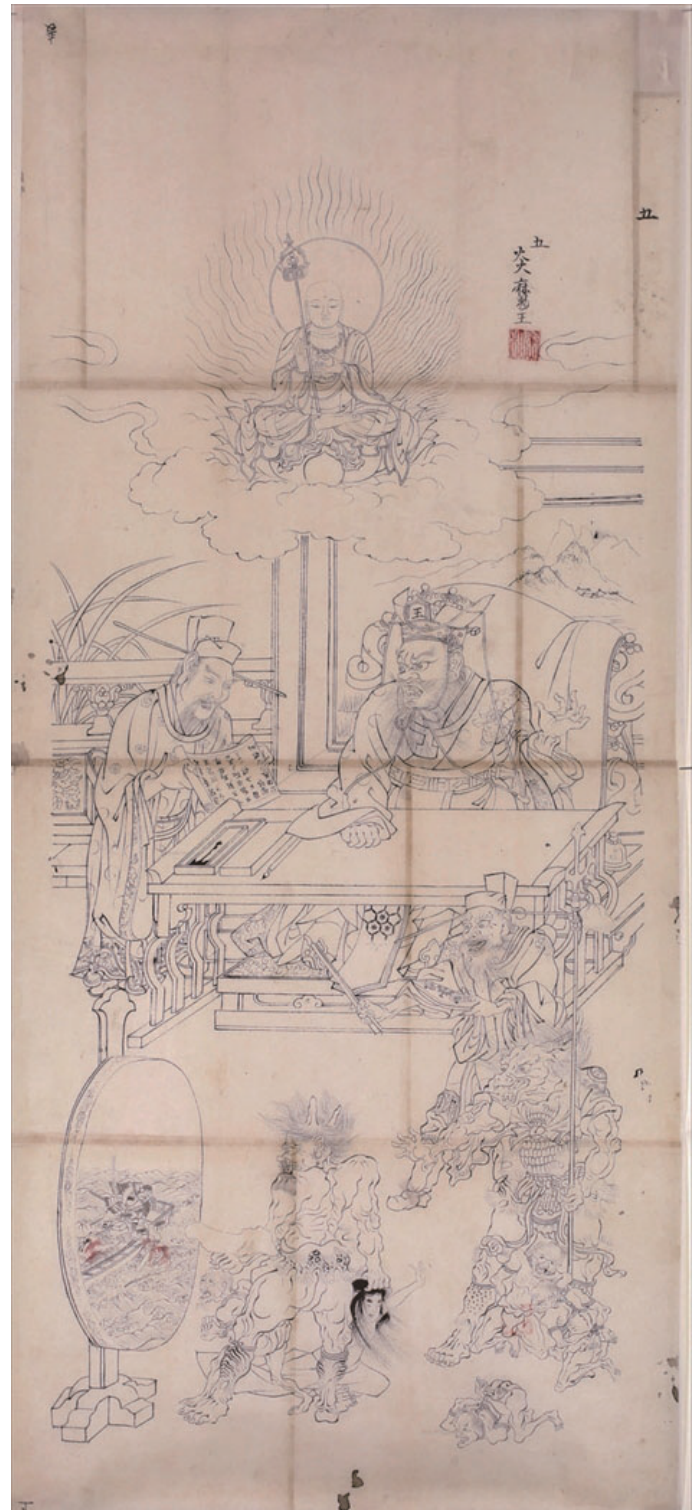
10 (参考) 小栗判官照手の姫・三莊太夫物語・法然上人小敦盛



11 (参考) 当流小栗判官



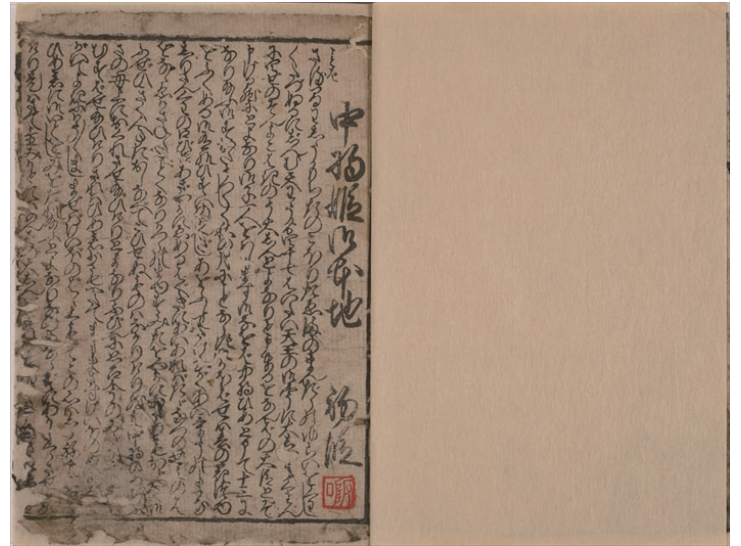
12 (参考) 小栗判官車街道



13 (参考) 十王図の内閻魔王図



14 (参考) 湯峯温泉図



15 中将姫御本地

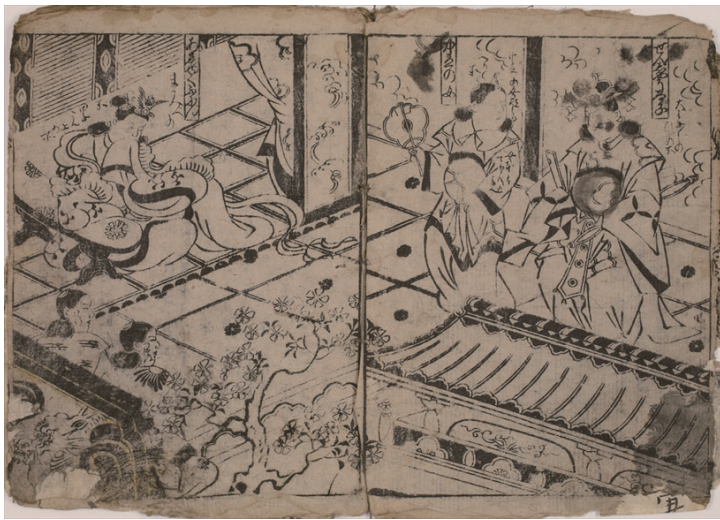


16 (参考) 当麻寺練供養会式

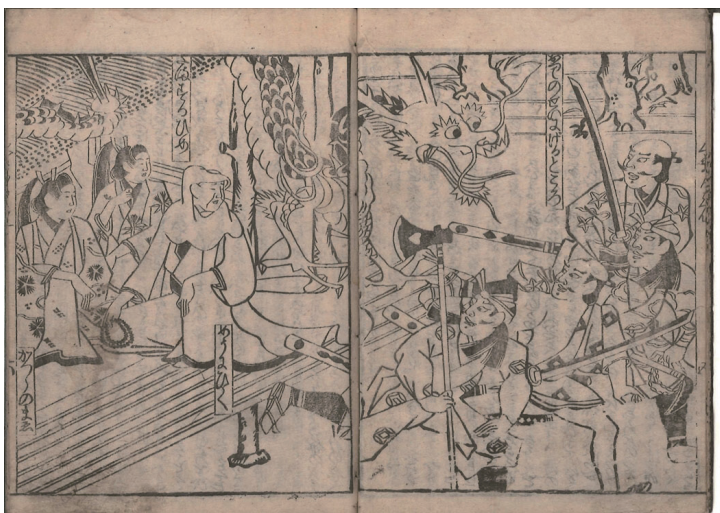




17 したの小太郎



18 法蔵比丘 (零本)



19 くまがえ





20 熊谷先陣問答



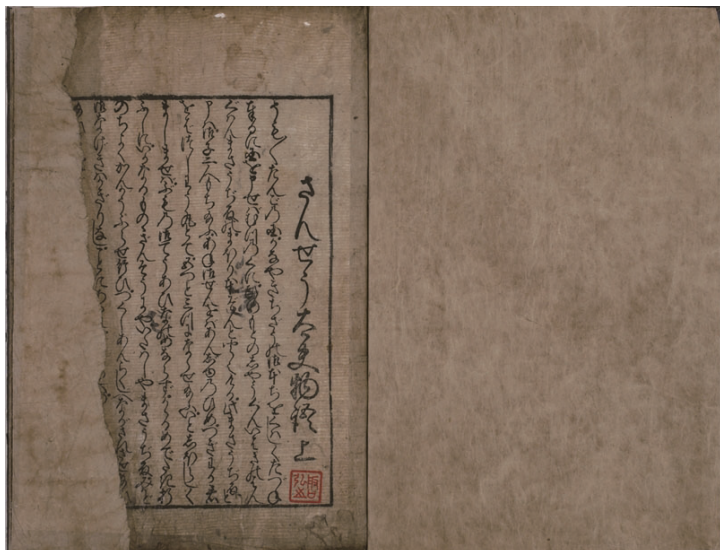
21 あいご物語







22 あいごの若



24 さんせう太夫物語





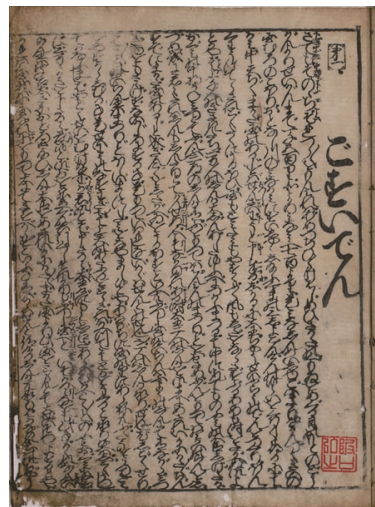
26 熊野の御本地



27 熊野の御本地 (零本)

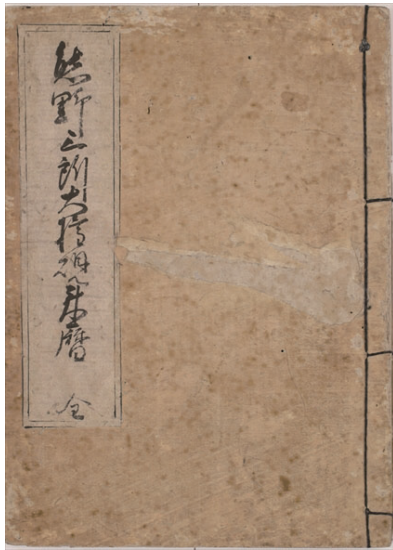


28 熊野の御本地 (零葉)

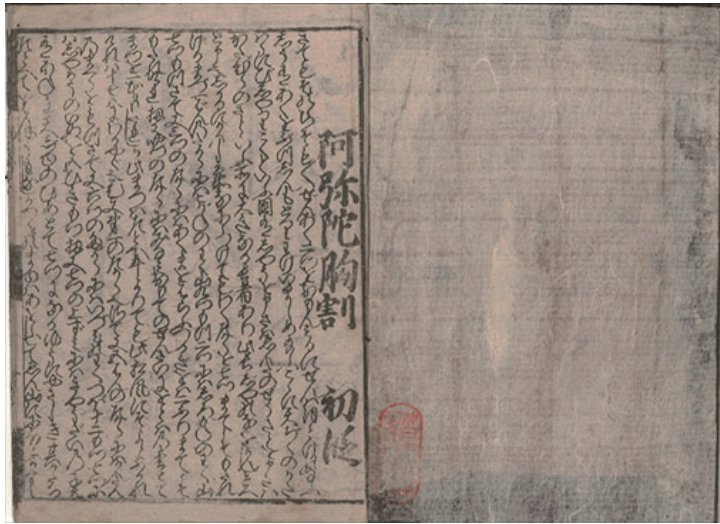
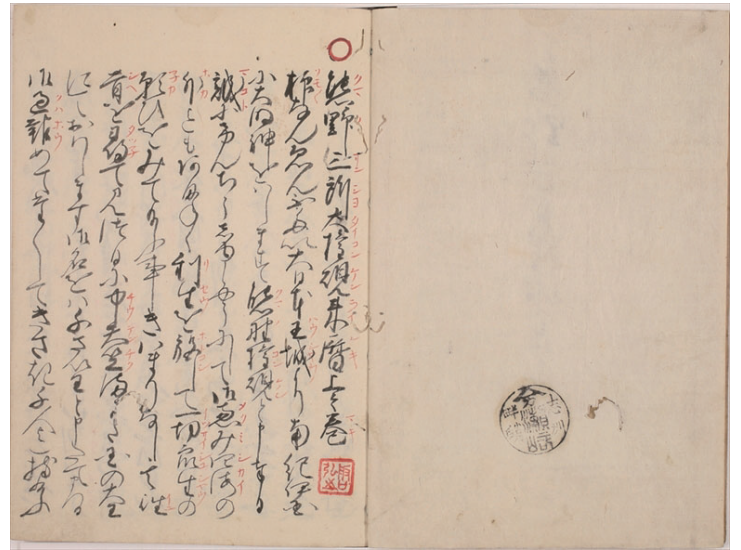


29 ごすいでん

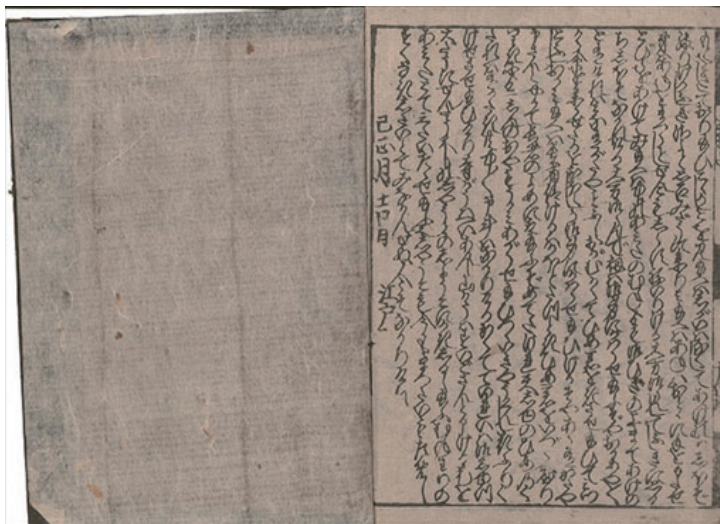




30 熊野三所大権現来曆

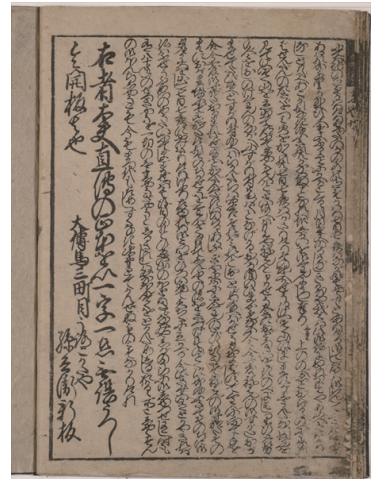


31 阿弥陀胸割





32 しやかの御本地

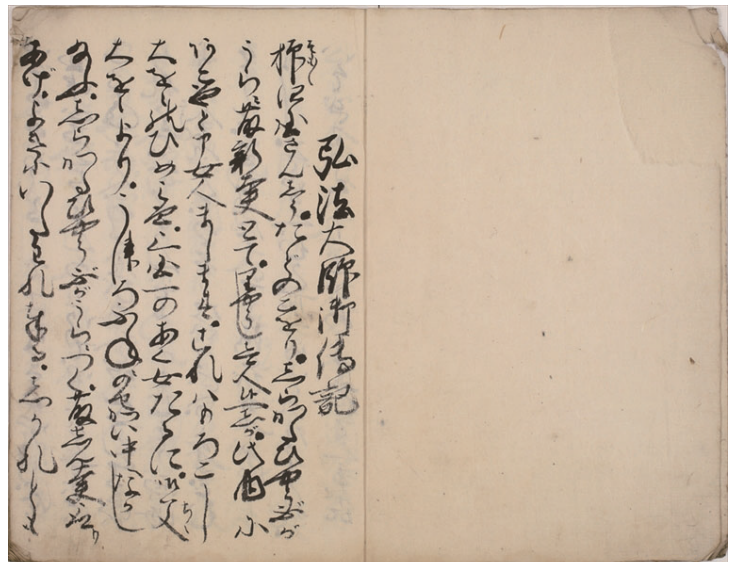
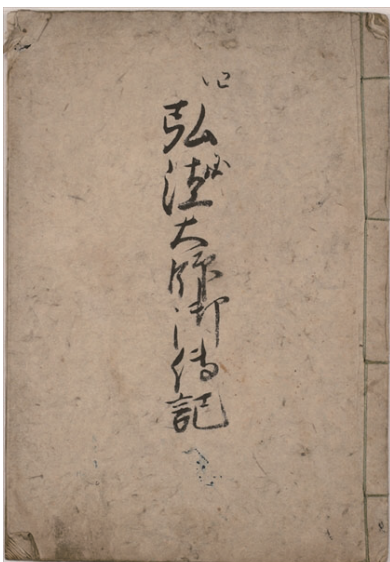
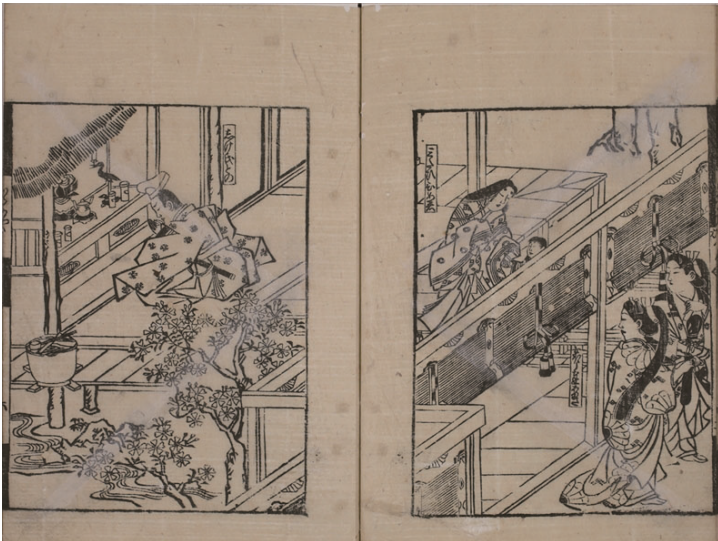


33 (参考) 釈迦如来御本地

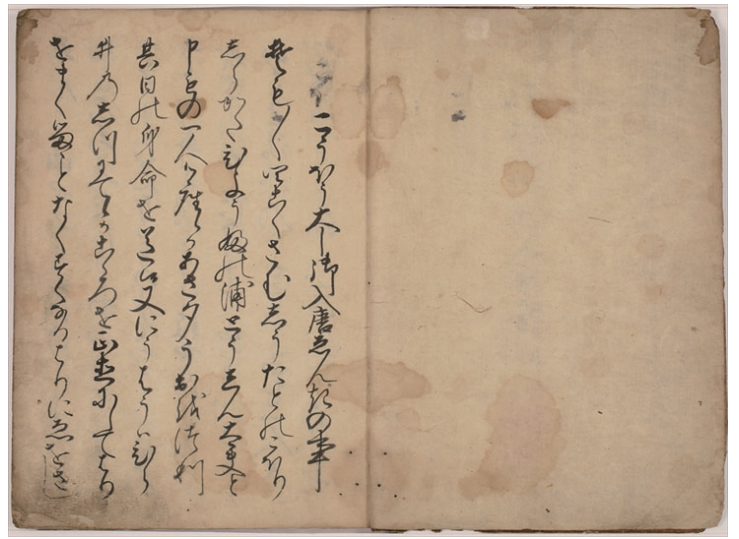
34 (参考) 釈迦八相物語



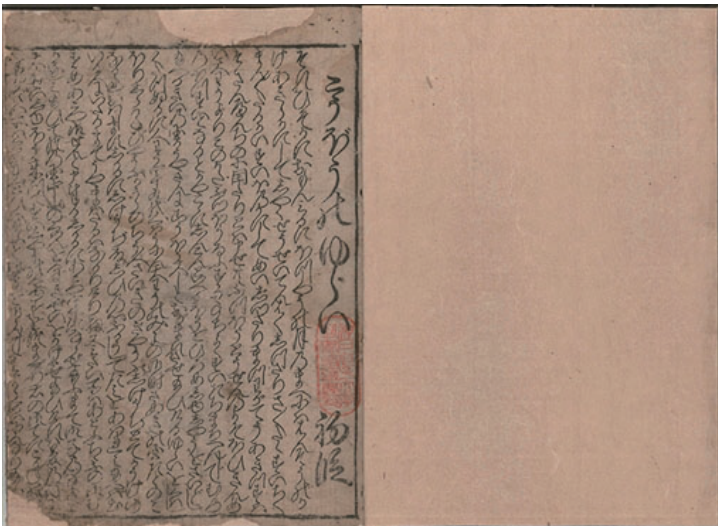
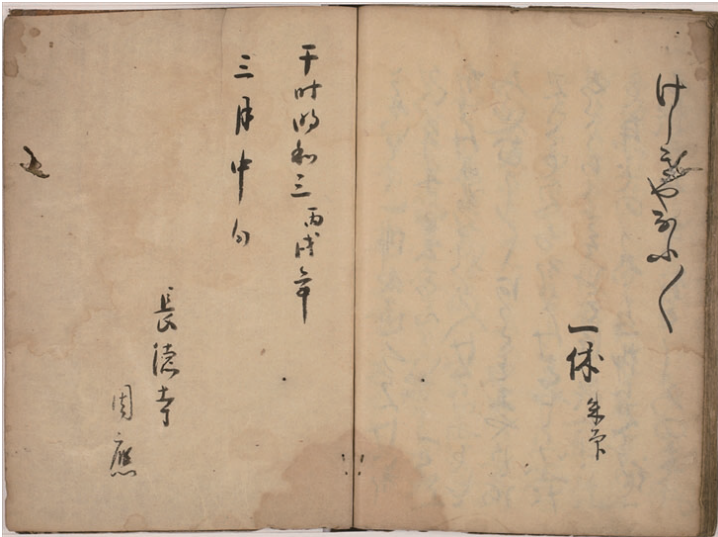
35 かるかや道心



36 (参考) 弘法大師御伝記



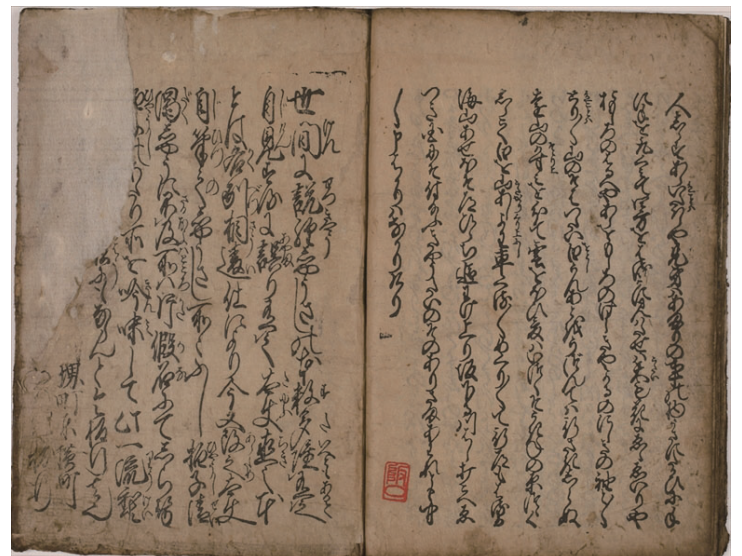
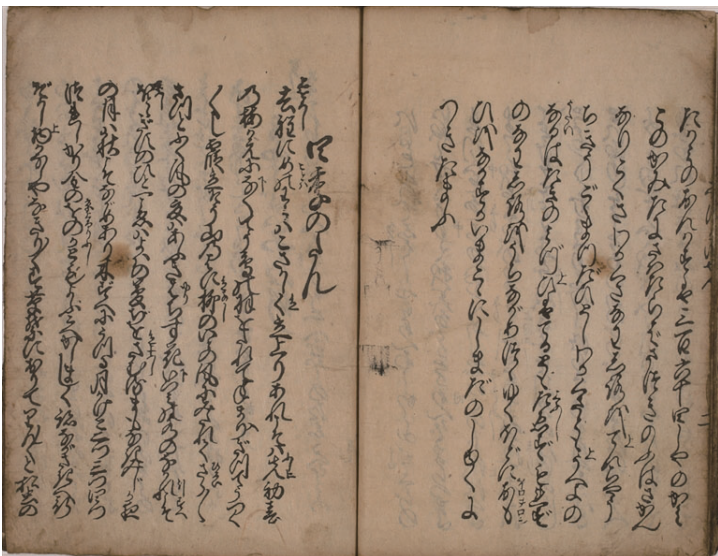
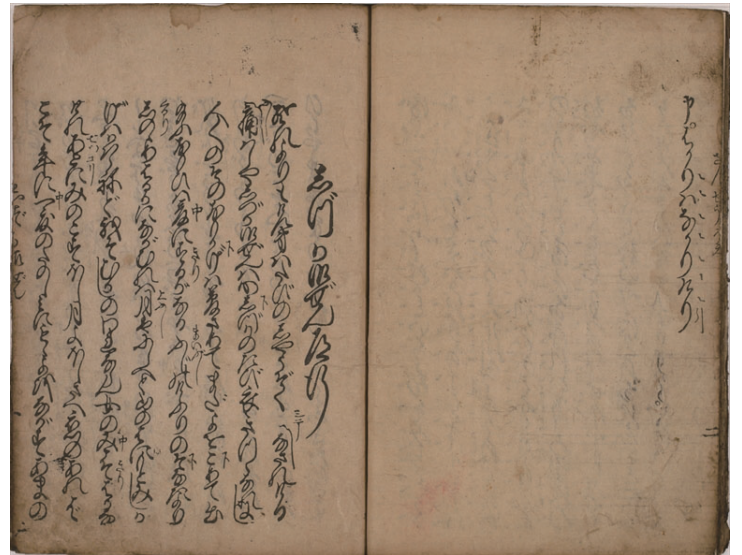
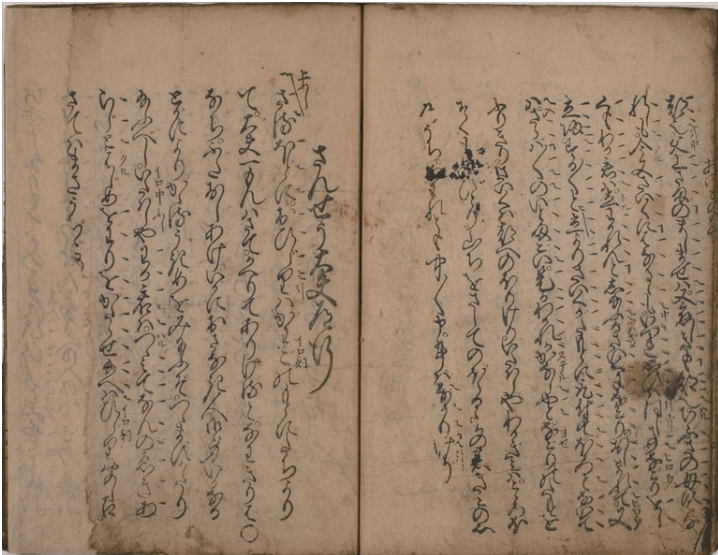
37 (参考) 弘法大師御入唐縁起



38 こうぼうのゆらい



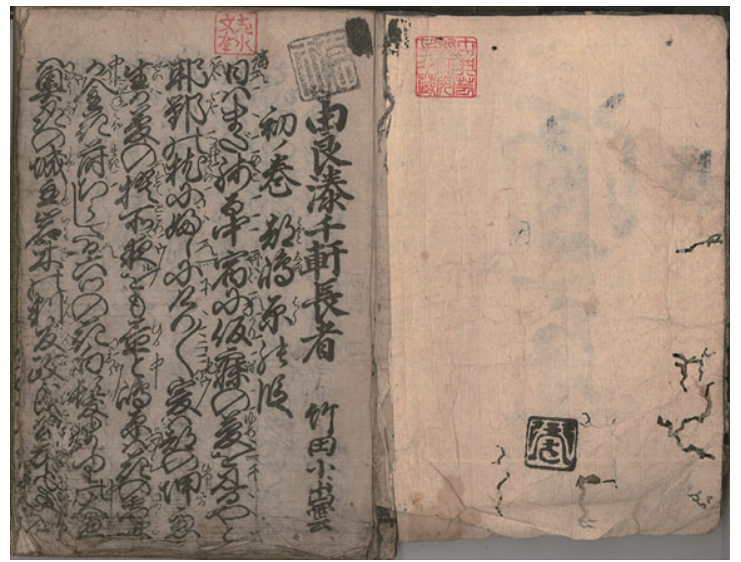
39 説経けいこ本







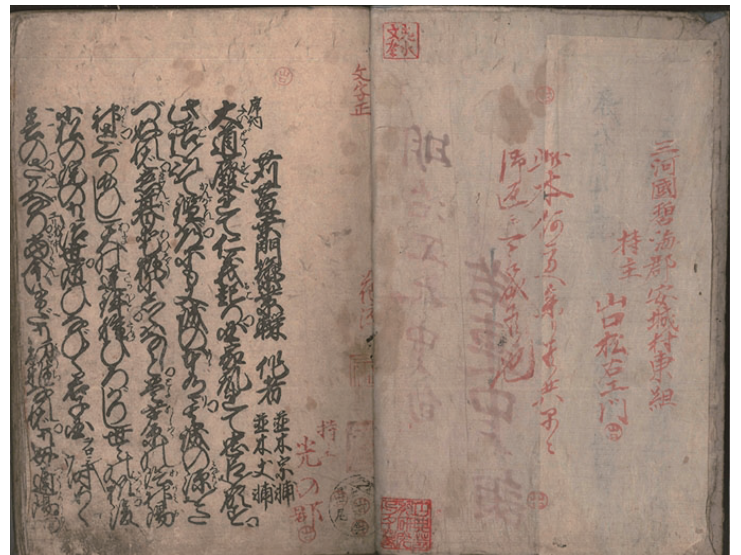
40 (参考) 愛護稚名歌勝閑



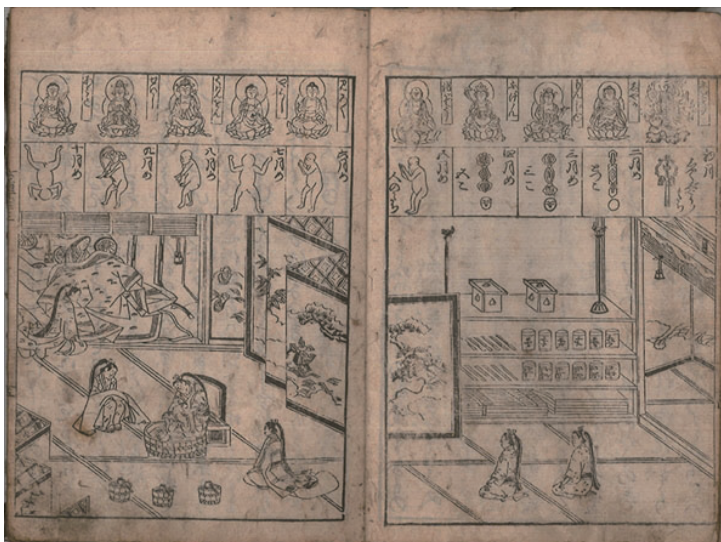
41 (参考) 由良湊千軒長者



42 (参考) [竹田新からくり]



43 (参考) 苺萱桑門筑紫蝶



44 (参考) 女重宝記

## 1、つほさかのさうし

(阪口弘之氏蔵)

写本1冊 四半本

藍色地に万字繫ぎに龍紋の空押しの覆い表紙。  
扉が元表紙で「つほさかのさうし」と直接墨書。  
7丁(墨付き6丁半)9行 奥書なし

本書は、説経浄瑠璃『まつら長者』に関わる草子で、諸本群の中では略本系に位置づけられる。主人公の姫君や人買い商人の名も記されない極めて短い草子であるが、説経浄瑠璃と同じ物語展開をもつ。人身売買を主題とするが、その哀れさというよりも、法華経功德を讃嘆して、女人往生を説き、壺坂や竹生島の縁起として結ばれている。

(『説経稀本集』阪口弘之氏解題より)

## 2、すみだ川

(阪口弘之氏蔵)

刊本1冊 中本 白無地表紙 外題は朱で直書  
8丁(冒頭1丁と末尾1丁(推定)欠)17行。

『すみだ川』は、古くから語られてきた説経の一つである。「松平大和守日記」万治4年2月13日条に挙げられている11種の説経外題の一つであり、また五説経の一つに数えられている。

本書は、『古浄瑠璃正本集』第三所収の赤木文庫本(大阪大学図書館蔵)とは異版、また同書解題にある慶應義塾蔵本3種とも版が異なる。上記いずれの本も16行であるのに対し、本書は17行である。本書は末丁が欠けているため、版元や所属は不明である。

## 3、写真で巡る小栗の旧跡

2015年10月開催の展示「説経「おぐり」の世界」  
展示パネルより。(写真撮影 川端咲子)

## 4、せつきやうおぐり(零葉)

(志水文庫蔵)

刊本の零葉3枚(中巻の表紙と本文2葉)  
寛永中期の刊本か(『古浄瑠璃正本集』第二参照)  
零葉①…中巻の表紙  
零葉②…小栗が横山の二度目の招きに応じて横山の館へ行く場面から酒宴の場面まで(中巻巻首)  
零葉③…六浦の漁師が救った照手を家へ連れ帰った場面

零葉①の中巻表紙は、初期の説経正本が3冊仕立てであり、その表紙はこのような素朴なものであったという、説経正本の形式を推定することができる貴重な資料である。零葉②③の本文は奈良絵本「おぐり」(天理図書館蔵)とほぼ一致する。この零葉によって、奈良絵本「おぐり」が依拠したのが初期の説経正本であったことが明らかになる。

## 5・6、をぐりの判官

(5 志水文庫蔵、6 古典芸能研究センター蔵)

※写真は5のみ

刊本1冊 半紙本  
9行 享保3年刊

5の1丁表に序文があり、「享保三(以下欠)」と記されている。1丁裏は目録。

序文末尾は欠けているが、これは佐渡七太夫豊孝の正本である。

## 7、(参考)小栗照手再の対面

(阪口弘之氏蔵)

刊本上中下3巻合1冊 小本  
江戸説経岡本美根太夫章  
三巻ともに共表紙 上4丁、中4丁、下3丁 7行

## 8、(参考)出世景清 牢屋の段

(志水文庫蔵)

写本1冊 小本 表紙に「説経祭文峯太夫」  
裏表紙に「嘉永二酉年/三月求/小川うし」と墨書

7、8はいずれも峯太夫(美根太夫)の正本である。美根太夫は寛政12年生まれ明治15年没。元は江戸の新内の太夫で、後に名古屋で説経祭文と新内を融合させた源氏節(説経源氏節)を創始した。

## 9、(参考)小栗判官照手姫

(志水文庫蔵)

刊本5冊合冊 半紙本 いずれも共表紙  
説経祭文 薩摩若太夫正本 6行  
江戸吉田屋小吉刊  
馬誉の段上下・曲馬の段上下・万屋の段上の5冊を合冊

## 10、(参考)小栗判官照手の姫・三莊太夫物語

法然上人小敦盛

(志水文庫蔵)

刊本12冊合冊 半紙本 いずれも共表紙  
説経祭文 薩摩若太夫正本 6行  
江戸吉田屋小吉刊

「小栗判官」の内、万屋の段上下・清水の段・買物段上下・車引段・矢取段上下・対面段上下と「三莊太夫」の内、安寿姫對王丸兄弟道行段・罪物語の段の12冊を合冊

## 11、(参考)当流小栗判官

(志水文庫蔵)

刊本1冊 半紙本 茶色無地表紙 28丁 10行  
近松門左衛門 作 京都 山木九兵衛刊

近松門左衛門による小栗判官の物語。

初段「相模が原小栗配所」「横山屋敷」、二段「横山屋敷」「馬場」、三段「小栗の屋形」「相模浦」、四段「藤沢の門前」「美濃青墓の宿万屋」「照手姫車の段」、五段「青墓の宿万屋」「藤沢寺」

話の筋は説経に近いが、鬼王鬼次兄弟や後藤左衛門を活躍させ、後藤の妻きさらぎを新たに登場させ、またその他の登場人物もより魅力的に描くなど、近世の浄瑠璃らしい増補改作が施されている。一方で説経の中では一つの山場であったであろう閻魔王の前の場面は割愛されている。

## 12、(参考) 小栗判官車街道

(志水文庫蔵)

刊本 1冊 半紙本 紺色無地表紙 88丁 7行  
竹田出雲・文耕堂作  
元文3年8月19日大坂竹本座初演

近松作の『当流小栗判官』をへて作られた浄瑠璃。小栗と照手よりも、周囲の登場人物に焦点が当てられる。説経の「おぐり」や近松の浄瑠璃とは異なり、小栗は毒殺されない設定で、毒を飲んだのは、身替わりにたった不寝兵衛という人物であった。近松の浄瑠璃ですでに、閻魔王の前の場面は描かれなくなっていたが、本作はさらに「蘇り」という設定そのものを無くしてしまっている。また横山の長男の太郎が、作り阿呆から本来の姿に戻る部分は好評であったらしく、後に歌舞伎『姫競双葉絵草紙』に取り入れられる。

## 13、(参考) 十王図の内 閻魔王図

(志水文庫蔵)

紙本墨書 10軸の内の1軸 江戸時代写  
画家不明

### ●十王について

十王とは、冥界の十人の王のことである。人は死ぬと、初七日から三年忌に至るまでの間に、この十人の王の前を通過し生前の所業を裁かれる。この十王信仰に基づく経典が、「十王経」である。唐末に中国で成立した『預修十王生七経』等の経典は、平安時代には日本に伝来した。さらにこの中国伝来の経典を元にして、日本で成立したのが『地藏菩薩発心因縁十王経』(『地藏十王経』)である。日本における十王信仰では、十王にそれぞれ本地仏が設定されているのが特徴である。十王の姿は、中国・朝鮮で十王図として絵に描かれるようになる。その中でも、特に中国宋代の十王図が多く日本に伝わり、日本において新たに十王図が展開していくこととなる。日本で製作された十王図は、中国の図を参考にしつつ、そこに日本特有の本地仏を付け加える形をとる。説経『をぐり』では、小栗と共に死んだ十人の家来が、十王として斎われる。

### ●十王図粉本について

掲出の「十王図粉本」は、室町時代の絵師土佐光信筆の十王図(京都 浄福寺蔵)の粉本。粉本とは、研究や制作の参考のために模写した絵画のことである。本図も、原本の忠実な模写と、各所に記された色指定の

詳細さが注目される。成立は江戸期か。絵師は不明である。元の図である浄福寺本十王図は、裏書や『実隆公記』の記述等によって、延徳元年(一四八九)後土御門天皇の逆修のために描かれたもので、後奈良天皇によって浄福寺に下賜されたものであることが判明している。

### ●閻魔王について

よく知られているとおり、閻魔王は冥界の王であり、死者は閻魔王の前で生前の罪障を問われ、地獄・極楽へと送られる。インドのヤマが仏教に取り入れられて閻魔となるのだが、中国ではさらに十王信仰と結びつき、地獄の裁判官である十王の一人と位置づけられるようにもなる。

### ●説経での閻魔王

早くに亡くなり冥界にいたあいごの若の母親は、息子の危機を知り閻魔王に願い出て颯に姿を変えてこの世に戻り息子を救う(説経『あいごの若』22挿絵参照)。毒殺された小栗とその家来十人は、閻魔王の前に引き出され、家来達の嘆願により、小栗は甦ることが許される(説経『をぐり』)。

## 14、湯峯温泉図

(志水文庫蔵)

墨摺彩色1枚  
成立年等不明

熊野の湯峯温泉の絵図。薬師堂を中心に、湯峯周辺、湯峯へ至る道筋などが記されている。なかには、餓鬼阿弥となった小栗が、浸かって元の姿に戻ったという壺湯も描かれている。

## 15、中将姫御本地

(阪口弘之氏蔵)

刊本 1冊 中本 白無地表紙  
外題は「中将姫御本地」と直書  
17丁(末丁欠) 16行 6段  
末丁欠のため、書肆は不明

『説経正本集』第三所収の赤木文庫本(大阪大学図書館蔵)とは異版。阪口氏メモに、「『説経正本集』掲出の底本より更に古く最善本」とある。本書は、挿絵部分の文字と本文に齟齬が見られる。一つは、三段目の合戦の場で挿絵には「はらさいこ」「たけおかさいこ」とあるが、本文に「はら」に該当する人物は出てこない(赤木文庫本にも齟齬がある。「つねはるはら切」「たけおかさいこ」とあるが、初段本文には「たけおか八郎つねはる」とあり「たけおか」と「つねはる」は同一人物である)。もう一つは、四段目で病死したのぶつなを埋葬する場面で挿絵には「中将ひめとふらい」「のぶつな女ほう」「のぶつなかはかところ」とあるが、この女房は先に戦死した竹おか八郎つね春の女房である。ちなみに、「のぶつな」は「ながいの三郎のぶつな」と本文中にあるが、どういう係累の人物であるかは本書にも赤木文庫本にも書かれていないが、中将姫の検死に来た侍である。

## 16、(参考) 当麻寺練供養会式

(撮影：平成 18 年 5 月 14 日川端咲子)

奈良県葛城市にある当麻寺では毎年 5 月 14 日に練供養会式という行事が執り行われる。これは、説経『中将姫御本地』にも描かれる中将姫の極楽往生の様子を、その命日である 5 月 14 日に再現するという儀式である。二上山を背景にした当麻寺本堂から娑婆堂まで長い仮設の橋が作られる。本堂は極楽、娑婆堂は現世を表す。儀式が始まると、本堂から娑婆堂へと橋を渡って、25 の菩薩が中将姫を迎えに行く。娑婆堂で中将姫の像を輿に載せると、菩薩たちは再び本堂(=極楽)へと帰って行く。夕方、中将姫を連れて夕陽を浴びながら二上山へ向かって帰っていく菩薩たちの姿は、経典に書かれ絵に描かれた往生する死者が仏に伴われて極楽へと向かう様子を目の辺りに見せるものである。当麻寺の練供養会式は、各地で今も行われている練供養の中で、最も古いものである。

## 17、しだの小太郎

(古典芸能研究センター蔵)

刊本 1 冊 中本 黒無地表面紙 享保頃刊か  
10 丁 17 行 蔵書印は「佐藤利作」  
裏表紙見返に「文政十二年葉月十日求之／山田村／佐藤理作持主」(墨書)

東京大学図書館霞亭文庫蔵本と同版。

## 18、法蔵比丘(零本)

(志水文庫蔵)

刊本 1 冊(零本) 半紙本 表裏ともに表紙なし  
破損多数 初丁欠 17 行  
奥書「右此本者太夫直傳之写本を以是をうつし／令板行者也」  
刊記「大傳馬三町目／うろこ形や孫兵衛開板」

赤木文庫(大阪大学附属図書館蔵)所蔵の『法蔵比丘』三本の内の 1 本と同板。本書は、横山重氏(赤木文庫旧蔵者)から信多純一氏(志水文庫旧蔵者)へ贈られた破本の一つである。『古浄瑠璃正本集』第二の解題には、本書と同板の本として尾崎久弥蔵本が紹介されており、宝永頃の本と推定されている。

## 19、くまがえ

(神戸女子大学図書館森修文庫蔵)

刊本 1 冊 中本 黒無地表面紙(裏表紙は紺無地)  
10 丁 17 行  
刊記に「享保九正月吉日 うろこかたや孫兵衛」

国会図書館所蔵天満八太夫の正本の「くまがえ」も鱗形屋孫兵衛版であるが、版型は半紙本であり、本書とは異なる。本書は八太夫正本の本文・挿絵に省略を施して刊行されているらしい。20 の佐渡七太夫系とも異なる。

## 20、熊谷先陣問答

(志水文庫蔵)

刊本 1 冊 半紙本 縹色無地表面紙 40 丁 7 行  
1 丁表に佐渡七太夫の序  
裏に「説経章指六段物目録」  
序文末尾に「享保三戊戌初春／佐渡七太夫豊孝」

## 21、あいご物語

(阪口弘之氏蔵)

刊本 2 巻合 1 冊(上巻欠) 大本  
藍色地唐草疋繋ぎ空押し模様  
中巻 10 丁半、下巻 12 丁 12 行  
末尾に刊記「鶴屋喜右衛門」  
題簽に「(糸／入) あいご物語」  
下巻は題の下に「下」中巻は破損

本書は、上巻を欠くが、万治頃の説経正本に依拠して、江戸の鶴屋喜右衛門から板行された絵入草子本である。大本仕立てで、元は 3 巻(3 冊)から成る。本文は、正本の段数表示や説経特有の口吻を取り除き、適宜加除変更もみられるが、概ね説経正本を忠実に草子化したものといつてよいであろう。

(『説経稀本集』阪口弘之氏解題より)

万治 4 年山本九兵衛版と平幡照政氏所蔵絵入り本双方の祖本が、本書の元になった本と推定できること、挿絵は平幡本とは一致せず万治 4 年版の挿絵を全て含んだ上で更に独自の挿絵があること、本書の説経正本刊行史における意義などは、上記解題に詳しい。

## 22、23 あいごの若

(古典芸能研究センター蔵)

※写真は 22 のみ

刊本 1 冊 中本 黒無地表面紙  
10 丁 16 行 末尾に刊記「享保 新板」  
書肆名不明  
題簽に「(繪／入) あいごの若」と墨書

本書は享保版の後刷りで 21 キャプションに記した万治版とは異版。挿絵も異なる。

## 24、さんせう太夫物語

(阪口弘之氏蔵)

刊本 1 冊 大本 藍色地疋繋ぎ空押し模様  
題簽「(糸／入) さんせう太夫 上」  
16 丁 14 行

本書は、21「あいご物語」同様に説経の草子本で、やはり「説経特有の口吻を取り除き、適宜加除変更もみられる」。寛永末年頃刊の説経与七郎正本に近い本文をもつ。本書は上巻のみであるが、中巻下巻は赤木文庫(大阪大学附属図書館蔵)にあり、下巻の巻末に「鶴屋喜右衛門」と版元が記されている。これまでに確認された説経の草子本はほかに「おぐり物語」(中下巻)がある。いずれも大本で上中下 3 巻仕立て、江戸の鶴屋喜右衛門からの刊行という共通点があり、江戸鶴屋

喜右衛門からの刊行という共通点があり、江戸鶴屋による説経草子本シリーズとして刊行されたと考えられる。現存しないが他の説経も草子本が刊行された可能性は否定できない。なお、新日本古典文学大系『古浄瑠璃 説経集』（岩波書店）の「さんせう太夫」では阪口弘之氏が本書を元に冒頭本文の復元案を示している。

## 25、さんせう太夫

(阪口弘之氏蔵)

刊本 1冊 中本 黒無地表紙  
7丁 (冒頭2丁と末尾欠) 17行

六段本 説経正本

## 26、熊野の御本地

(神戸女子大学古典芸能研究センター蔵)

刊本 1冊 中本 黒無地表紙 12丁 16行  
破損多し

題簽は手書で中央に外題「熊野之御本地」、右に「くまののごほんち」左に「くまの ごおうほういん」、下に鱗の紋と「大傳馬／三町目」

奥書・刊記「右ハ太夫直之正本ニ而写之畢 うろこかたや孫兵衛板」奥書の横に「宝永六年」と墨書

27の零本と同じく鱗形屋孫兵衛板の本であるが、版型・挿絵等全くの別板。本文の系統は同じ。熊野の本地を語る物語は、室町時代物語、説経、古浄瑠璃と様々なジャンルにまたがっている。特に室町時代物語は、その形態も絵巻・奈良絵本・写本・刊本と様々である。語り物に関して言えば、それが説経か浄瑠璃かの判別は難しく、例えば29の『ごすいでん』は、古浄瑠璃の正本であるが、その本文は万治頃の説経の本文を伝えているわけで、説経としても浄瑠璃としても語られてきたと言うよりない。

## 27、熊野の御本地 (零本)

(志水文庫蔵)

刊本 1冊 半紙本 表紙なし  
7丁 (冒頭6丁分欠) 17行

奥書・刊記「右者太夫直之正本を以写之畢 大傳馬三町め うろこ形や孫兵衛新板」

18と同様に、横山重氏(赤木文庫旧蔵者)から信多純一氏(志水文庫旧蔵者)へ贈られた破本の一つである。前半が欠けているだけでなく、全丁虫損が多いが、刊記は残り、『古浄瑠璃正本集』第一所収の東京大学図書館霞亭文庫蔵本と同版であることが確認できる。

## 28、熊野の本地 (零葉)

(阪口弘之氏蔵)

零葉 3枚 中本 柱題に「熊野」

二段目の相人が偽りの占をつげる部分と、四段目の女御が首を討たれる場面(上段に懐胎十月図が載る部

分)、計3丁分のみ。26、27の鱗形屋版と挿絵の構図は似るが異版。てんじでは、26・27・28の懐胎十月部分の写真を比較のために並べた。

## 29、ごすいでん

(阪口弘之氏蔵)

刊本 1冊 半紙本 黄檗色無地表紙

11丁 18行

題簽中央に外題「ごすいでん」、外題右に「きしうくまのゝ御ほんち」外題左に「くわいたい十月さいもん入 太夫直之正本」

外題下に3行で「ふ屋町通／八文字屋／八左衛門」刊記「ふ屋町通せいぐわんじ下ル町 八文字屋八左衛門板」

万治頃の説経の語り本文を伝える1冊。ただし、各段末の「かんとめ」や「なきふし」などの文字譜から、古浄瑠璃の太夫山本角太夫の正本であることはあきらかである。角太夫が「なきふし」を用いた時期からの推定により、延宝5年以前の正本と考えられる。また本書に先立つ伊藤出羽掾正本の存在も想定できる。以上の考証は、阪口弘之氏「延宝の浄瑠璃二種(紹介と翻刻)―『あきのよ長物語』と『ごすいでん』―」(『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』5号)による。

## 30、(参考)熊野三所大権現来暦

(阪口弘之氏蔵)

写本 3巻 1冊 半紙本 薄茶無地表紙

35丁 9行

奥書等なし 本文の漢字には朱で振り仮名(片仮名)が付されている

内容は「熊野の本地」の物語。各巻の冒頭には章題がなく、以下「相人御懐妊の女御を占ふ事」「后達武士七人をかたらふ事」「御すいてん武士に伴われ御殿を出させ給ふ事」「武士とも女御の御首を切る事(上巻)」「わう子を畜類共守護する事」「王子成長してまかた国へ帰り給ふ事」「わう子父大王に逢給ふ事(中巻)」「御すいてん蘇生し給ふ事」「大王日本へ渡せ給ふ事」「大王の御けんそく紀伊国熊野権現とならせ給ふ事」「熊野赤むしの由来の事(下巻)」と続く。

松本隆信氏による「熊野の本地」分類のA I系統(天理図書館蔵元和八年写絵巻など)に近い本文を持つ。漢字に振り仮名が付られている点から、絵解きに使われた可能性も想定できる。

## 31、阿弥陀胸割

(神戸女子大学図書館森修文庫蔵)

刊本 1冊 中本 黒無地表紙 10丁 16行

刊記は「己正月吉日 江戸」とあり、「江戸」の下は削られている。

「阿弥陀胸割」は、古浄瑠璃で古くから語られてきた語り物である。例えば『三壺聞書』慶長19年条には「阿弥陀ノ胸割牛王姫ナト云へる上瑠璃アリ」とあり、元

和初年（1615）頃の作とされる舟木本「洛中洛外図」には、人形操りを見物する人々が描かれ「むねわりあやつり」と書かれている。

浄瑠璃の『阿弥陀胸割』は古活字版と慶安四年版があり、説経の『阿弥陀胸割』は鱗形屋孫兵衛版、村田屋版、西村屋版がある。浄瑠璃・説経の正本は個別に存在するのではなく、双方複雑な関係を持っていることは先学の指摘に詳しい。本書は、刊記の書肆部分が削られているが、説教系正本の中でも享保頃の成立と考えられている江戸の西村版である。

### 32、しやかの本地

（古典芸能研究センター蔵）

刊本 1冊 半紙本 黒無地表紙 題簽なし  
13丁 17行  
奥書「右者太夫直傳の正本を以一字一点無誤うつし令改版者也」  
刊記「大傳馬三町目うろこかたや／孫兵衛新板」

本書には所属を示すものがないが、『説経正本集』第一所収の赤木文庫本（大阪大学付属図書館蔵）と同板であり、赤木文庫本が題簽に天満八太夫の名を記すことから、本書も天満八太夫正本となる。ただし、本書も赤木文庫本も本文には「七太夫」「梅太夫」とある。刷りは本書の方がよい。挿絵は『説経正本集』解題によると鳥井清信。

### 33、（参考）釈迦如来御本地

（志水文庫蔵）

刊本 3巻1冊 大本 茶色無地表紙  
59丁（上：21丁・中：18丁・下：20丁）  
寛文板同板無刊記本

室町時代成立と推定される釈迦の伝記。「釈迦出世本懐伝記」「釈迦物語」ともいう。おそらく説法唱導の場で語られてきたものの集約らしい。写本は、天理図書館・彰考館・岩瀬文庫・東洋文庫等・大英博物館等が所蔵、古活字本は、国会図書館・天理図書館・大東急記念文庫等が所蔵するが、全巻揃いは現存しない。板本は、寛永20年橘屋源兵衛板本・慶安元年板本・明暦頃山田市郎兵衛乱板本・明暦2年版丹緑本・寛文2年吉野屋権兵衛板本・寛文板同板無刊記本・寛文10年本間屋板本・和泉屋庄次郎板本・桑村半蔵板本と多数の版が現存する。

### 34、（参考）釈迦八相物語

（志水文庫蔵）

刊本 大本 8巻5冊 紺無地表紙  
38・35・51・53・85丁  
寛文六年 心齋橋筋伊丹屋善兵衛・同通塩屋平助刊

作者未詳の仮名草子。釈迦が一代に示した八相（降兜率・入胎・住胎・出胎・出家・成道・転法輪・入滅）を中心にその生涯を描く。前半では、摩耶夫人の受胎とその姉橋曇弥の嫉妬調伏、太子の誕生と摩耶夫人の臨終という劇的場面があり、後半では出家後の釈迦が

悪魔をしりぞけ迫害に耐えながら弘法する力強い姿が描かれ、質量ともに当時におけるすぐれた伝記物語である。（『日本古典文学大辞典』より）

### 35、かるかや道心

（阪口弘之氏蔵）

刊本 1冊 半紙本 黒無地表紙 12丁 17行  
題簽に「かるかや道心」と外題、その下に「大傳馬町／三町目／靄屋喜／右衛門／改刊」  
刊記「正徳二年六月吉日大傳馬三町目靄屋喜右衛門改刊」 挿絵は見開き3図のみ

従来知られていた説経「かるかや」は、寛永8年・寛文2版・寛文頃版・貞享3版・貞享頃版・宝永頃版・享保8版であり、正徳2年に刊行された本書は、新出本である。

挿絵の数は少なく省略されたと思われるが、一部分は赤木文庫（大阪大学付属図書館蔵）本2冊の内の鱗形屋孫兵衛版と構図が類似する。

### 36、（参考）弘法大師御伝記

（阪口弘之氏蔵）

写本 1冊 白無地表紙 外題「弘法大師御伝記」  
途中一部欠  
（奥書）寛政二庚戌五月中旬写之也云々

「弘法大師御伝記」は「寛政二庚戌五月中旬写之也云々」の奥書をもつ語り本で、内容的には説経「苺萱」の「高野巻」に対応する。「空海根本縁起」とも呼ばれていて、説経の「高野巻」と対比する時、善通寺や石手寺等をめぐる四国の弘法伝説が前面に押し出されている。その意味では地方的な語り物で、事実、四国では同趣の「空海混本縁起」なる書の存在が確認されており、元禄以前に板本でも行われていたらしい。しかし、その語りが説経から派生したものと考えるに、むしろ、「高野巻」が弘法大師信仰圏では古くから独立した語り物としてあったことを想定させる。（阪口弘之氏「高野の伝承二題―「弘法大師御伝記」「鶯の弥陀の事」―」（『人文研究』44,1992）より）

説経「かるかや」で、父繁氏（苺萱道心）が高野山にいたことを聞いた石童丸は母と共に高野山の麓の学文路までたどり着く。明日は高野山へ登ろうと言う二人に、玉屋の主人は高野山は女人禁制であると告げ、弘法大師の物語を語って聞かせる。弘法大師の母のあここの御前の素性から始まり、弘法大師の誕生、出家、入唐、文殊菩薩との問答、帰国、母との再会と高野山女人禁制のことと続く物語は、説経「かるかや」の中に、一つの独立した「高野巻」と呼ばれる語り物として存在している。この「高野巻」の成立には、四国に伝わる弘法大師の伝説との繋がりなどが想定されている。（参考文献：阪口弘之氏「説経「かるかや」と高野伝承」

（『国語と国文学』71巻10号）など）

## 37、(参考) 弘法大師御入唐縁起

(阪口弘之氏蔵)

写本1冊 大本 茶色無地表紙 外題なし  
27丁  
扉題「弘法大師御入唐縁起」  
内題「こうほう大し御入唐ゑんきの事」  
末尾数丁は「弘法大師御入唐縁起」とは無関係の歌謡か。  
奥書「于時明和三丙戌年／三月中旬／長徳寺／因應」

「高野巻」の内、弘法大師の誕生から出家、入唐、文殊菩薩との問答までを記し、  
其のちこうほう日ほんへきちやうあり高野山をひらき給ふも衆生りやくのためなりよつてこうほう大し御入とうのゑんきたいりやくかくのこことく敬白で結ばれる。

## 38、こうぼうのゆらい

(神戸女子大学図書館森修文庫蔵)

刊本1冊 中本 黒無地表紙(替表紙)  
16丁 17行  
末尾欠丁のため書肆不明 内題に「こうぼうのゆらい」挿絵六面

本書については『歌舞伎浄瑠璃稀本集成』下巻の解題(井上勝志氏)に詳しい。以下、解題から重要な指摘を二三挙げる。

- ・挿絵の第三・四図は、万治頃刊の『だるまの御本地』第三・四図と第七・八図を取り合わせたものである。
- ・弘法大師を扱った浄瑠璃作品との関連は辿れない。
- ・説経「かるかや」の「高野巻」と深く繋がる本文を持つ。
- ・あこや御前が中山寺で申し子をして空海が誕生するという話の展開は、「高野巻」にはなく、四国で伝承されてきた弘法大師の伝説との関連が考えられる。

## 39、説経けいこ本

(阪口弘之氏蔵)

刊本1冊 半紙本 茶色無地表紙 16丁 9行  
題簽に「説経けいこ本」その左横に「武蔵権太夫直傳」脇方簽に「おぐりくるまのだん／てるての姫道行」かるかや道行」しんとく丸道行」あいどの若道行」さんせう太夫道行」てんぢくいしやの始り／ぎばたんじやう道行」しづか御せん／ほうらくの舞」所収本文は「てるて道行」「かるかや道行」「しんとく丸おと姫道行」「あいこのわか道行」「さんせう大夫道行」「しづか御ぜん道行」「四季のたん」「きやうだい女道行」

本書は珍しい説経節の段物集である。武蔵権太夫は、延宝天和頃から活躍がみられる説経の太夫で、天満八太夫の脇を勤めていたことが確認できる。単独正本もあり、また後には歌舞伎界にも進出したらしい。本書については阪口弘之氏著「佐渡七太夫と武蔵権太夫—説教段物集を紹介しながら—」(『かがみ』40,2009)に詳しい。

## 40、(参考) 愛護稚名歌勝鬨

(志水文庫蔵)

刊本1冊 半紙本 96丁 7行  
宝暦3年竹本座初演の浄瑠璃  
作者は近松半二・三好松洛・吉田冠子・武田外記・中村閨助

説経「あいごの若」系列下の浄瑠璃の一つ。紀海音作『愛護若峙箱』の改作。説経の重要なモチーフであった継母の恋慕による悲劇という側面は無くなり、二条・古曾部両家の確執と両家の若君・姫君の恋が物語の中心となっている。

## 41、(参考) 由良湊千軒長者

(志水文庫蔵)

刊本1冊 半紙本 89丁 7行  
宝暦11年竹本座初演の浄瑠璃  
作者は近松半二・竹本三郎兵衛・三好松洛・二歩軒・北窓後一

説経「さんせう太夫」系列化の浄瑠璃の一つ。竹田出雲作『三莊太夫五人嬢』の改作であり、お家騒動的に展開する物語も登場人物の名もいくつかの趣向も本文も先行作に依るところ大である。説経の重要モチーフの一つであった地蔵の本地部分は失われている。

## 42、竹田新からくり

(神戸女子大学図書館森修文庫蔵)

刊本1冊 中本 赤無地表紙 15丁  
宮武外骨・石割松太郎・安田善次郎旧蔵  
表紙見返、裏表紙見返に識語有り  
表紙と表紙見返しに元表紙の方簽と思しきものを貼り付け

竹田のからくり・子供狂言・おどりの絵巻。表紙に書題簽で「大からくり繪盡」とあるが、国会図書館に三巻三冊の同板本が所蔵されており、題名が「竹田新からくり」とある。本書の題もそれに合わせた。

第一から第五まで載るが、第五は「第五地狂言備前長光」「前からくり胎内十月図」「子供初梓巫大臣」「からくり萬歳稚大力」「からくり三弦二挺鼓」という構成になっている。この「前からくり胎内十月図」が、『熊野の本地』に描かれている懐胎十月の図をからくりに見せたものである。

## 43、(参考) 苺萱桑門筑紫鞆

(志水文庫蔵)

刊本1冊 大本 献上本 紺無地表紙  
91丁 7行  
正本屋九左衛門版

朱の書き入れが多数みられる。表紙見返しに「三河國碧海郡安城村東組／持主山口松右衛門」「此本何方へ参り罷候共早々／御返シ可被成下候也」と朱で書き入れ。

享保 20 年豊竹座初演の浄瑠璃。作者は並木宗助・並木丈助。説経「かるかや」系列化の浄瑠璃の一つ。

筑前の大名加藤左衛門繁氏が正妻禎の方と側室千鳥の前の表面は仲よく見えて内心はすさまじい嫉妬の葛藤を知り無常を観じて、高野山に遁れて苺萱道心となり、捕らえられた謀反人大内義弘の命乞いをさせることを我子石堂を筑紫へ送ると轢させる。（『浄瑠璃作品要説』5より）

#### 44、(参考) 女重宝記

(志水文庫蔵)

刊本 半紙本 縹色無地表紙

女重宝記は本来 5 巻 5 冊の本。掲出するのはその内の巻之三「くわいにんの巻」に記された「胎内十月の図」

#### 【参考】『説経正本集』 解題原稿 (志水文庫蔵)

『説経正本集』は、昭和 43 年角川書店から刊行された。校訂者は横山重氏である。氏は先に『説経節正本集』を昭和 11 年から 12 年にかけて大岡山書店から出版されており、『説経正本集』はその再編である。ここに展示したのは、『説経正本集』解題の元となった、横山重氏による説経正本の書誌カードである。

古典芸能研究センター所蔵の志水文庫の資料には、横山重氏の自筆の原稿や目録も含まれている。志水文庫旧蔵者である信多純一氏は横山氏と親好が厚く、『説経正本集』解題部分執筆に少なからず関わっておられた。こうした資料類がいつ横山氏から志水文庫へと渡ったかは不明であるが、これら横山氏自筆原稿も志水文庫の資料の中で重要な一角を占める事は間違いない。

『説経正本集』刊行にあたって、横山氏は凡例の最後に以下のような事を書かれている。

信多純一氏、室木彌太郎氏は、本集編纂のはじめから御協力くださいました。又、松本隆信氏は中途から熱心に御協力くださいました。お三方の御協力があって本集はできました。

#### 【参考】胎内十月の図について

説経「熊野の御本地」の正本には必ず、母親の胎内で成長する胎児の様を描いた胎内十月の図（懐胎十月の図）が載り、正本本文には以下のような文章が続く。（本文は『説経正本集』第一から引用、適宜漢字をあてた）

されは人間の出生する初を、あらあら語りて聞せん、先母の胎内に宿る初の月は、不動のけにて、独鉗の姿を表せり、されは不動といふ文字、一つの幼い力を重るとかけり、苦験目前三悪道に迷ひ出る初也、二月目は如意宝珠、釈迦如来にてまします、その形、錫杖のことし、三月目は文殊菩薩、その形、三鉗に表せり、四月目は普賢菩薩、頭と左右の手足出来たり、大日の形を少表す也、五月目は地藏菩薩、六根悉く具はる、是六道の初也、六月目は弥勒菩薩、五輪五体のことく也、七月目は薬師如来、されば母の胎内を、浄瑠璃世界共、又は浄土共これをいふ、八月目は観音菩薩、十五

円満の月のことし、表頭に光をほとこす、爰に又成仏共、発心の大日共いふ也、九月目は勢至菩薩、勢至の二字は、生るゝ事は丸か力に至ると書く、此処を伊勢天照大神共いへり、されは伊勢といふ文字は、人は是丸か力に生るゝと書けり、十月目は阿弥陀如来、つかへりとて、此目の前の地獄へ、真つ逆さまに落る也、是六道へ迷ひ出る初也、佛の恩慈悲かくのごとし

説経の諸本によって載る胎内十月の図や本文には異同がある。また、胎内十月のことが語られる位置も、本文の系統の違いで、第二段の場合と第四段の場合とがあるが、いずれにしても、一月毎に胎児を守護する仏の名が挙げられ、胎児の姿が独鉗・錫杖・三鉗・五輪など仏具によって示されている。こうした考え方は、古く中世にまで遡れる。近世においては、説経「熊野の本地」に描かれるような絵がポピュラーになり、女性の教訓書・教養書的な性格を持つ(44)『女重宝記』では巻之三「くわいにんの巻」で、懐妊に関わる様々な知識を記す中にこの「胎内十月の図」が載る。一方、芸能の世界では説経「熊野の本地」に取り入れられたように、懐胎十月の様が語られるという局面を持つ浄瑠璃がいくつか生まれる（例えば、近松門左衛門作の浄瑠璃『せみ丸』）。浄瑠璃の場合、胎内十月の様子は、絵で見せるのではなく、からくりを使って、一月目から十月目までの胎児の変化を順に見せていたものと推定される。その根拠として、竹田からくりの一座に「胎内十月」という演目があったこと(42『竹田新からくり』参照)が挙げられる。

【企画展】 神戸女子大学古典芸能研究センター研究資料集 1  
『説経稀本集』刊行記念展示

#### 「説経稀本展」

—森修文庫・志水文庫・阪口弘之氏蔵本から— 目録  
(2018年4月16日～6月15日  
神戸女子大学古典芸能研究センター展示室)

2018年5月1日公開

編集 神戸女子大学古典芸能研究センター  
(展示企画・図録作成担当 非常勤研究員 川端咲子)

〒650-0004

神戸市中央区中山手通二丁目 23-1



